

## 僧侶の長い列

ミャンマーは多様な民族がいる国で、キリスト教、ヒンドゥー教、特にイスラム教が強くなっている地域もありますが、一般の人たちは敬虔な仏教徒です。ミャンマー第二の都市マンダレーからバスで 30 分、アマラプラにある「マハーガンダーヨン僧院」での朝の托鉢風景は壮観です。この僧院はミャンマー国内最大級で最高位といわれ、全国から集まった僧が約 1000 人修行をしています。週に一度観光客を受け入れており、写真撮影もできます。

僧侶は広い敷地の中庭の一角に並び、長い列の先に進んで寄進者からご飯を鉢に入れてもらいます。ご飯だけ驚くほどたくさんもらいます。その後洗濯用の石鹸を受け取り食堂へと進み、大食堂で皆一緒に



食事を摂ります。おかずは当番の僧侶が作っているようですが、大変質素です。食事は朝、夕2回、日中はお経を唱え、瞑想、洗濯をします。ミャンマーでは成人した僧侶は赤、見習いの少年僧は白、尼僧はピンクの袈裟を身にまとっています。高位的僧侶になると政府や篤農家からの寄進がたくさんあるようで、例えば一族に高僧がいるとその親戚までもが潤う生活ができます。(佐藤 健次)

写真:ミャンマー・ヤンゴン郊外 2009 年

“アールディーアイ通信 No.44/2009”から

---

## 驚異の米運送バイク便！

フィリピンのミンダナオ島、南アグサン州で、とんでもない量の米を運んでいるバイクに出会いました。一袋約 50kg の籾が入った袋を、片側に 4 袋ずつ、後部にも 3 袋、全部で 11 袋、550 kg も載せています。稲生産者のところから、乾燥、もみすり、精米をする流通業者のところまで運ぶバイク運送屋です。雨の多い地域で、農家が自分のところで稲籾を乾燥させるのは難しいため、収穫後すぐに流通業者に売ってしまいます。流通業者は稲生産に深く関与していて、青田買いはよくあることですし、収穫まで請け負うこともあり



ます。農道は細く舗装などされていませんので、農村部の運送にトラックなどを使えず、中型の改造バイクが活躍します。仕事とはいえ、悪路、550 kg の米をバイクで運ぶのは芸術的な技です。

このバイク、農閑期はタクシー代わりに使用されます。板を取り付けて、片側に 5 人、後ろに 5 人、合計最大 15 人程度が乗れるそうです。軽トラックを改造した乗り合いタクシーも増えていますが、バイク便の繁盛が続きます。(末光 健志)

写真: 曲芸師まがいのバイク運送屋 2008 年

“アールディーアイ通信 No.43/2009”から

## 記念写真は植物公園で

モザンビーク、ショクエ市のほぼ中心部にある植物公園で、時折結婚記念写真の撮影に出会います。登記所での婚姻手続きあるいは教会での儀式を終えたカップルが、時には多くの参列者とともに撮影にやってきました。法的な婚姻手続きは、登記所で15日間の婚姻通知掲示が済んでから証人を伴って登記して完了します。通例は届出後に宗教婚の儀式をすることが多く、近年は儀式を終えてから届け出るカップルも増えているそうです。撮影の後新婦はいったん実家へ戻り、付き添いとともに新婚生活用品や食べ物飲み物を持って新郎の実家へ向かい、新郎の親が張る祝宴に出ます。経済的余裕のあるなしで、正装のカップルを中心に、何台もの車を連ねて目抜き通りをパレードすることもあります。



既婚者と称する人でも特に若い人に法的な手続きを済ませていない人がいます。近頃はだんだん珍しくなっているようですが、一定額の現金、一定数の牛や山羊などの婚資を男の側が用意できていなかったり、子が授かってから登記所に届け出るならわしにまだ従うひとがいるためだそうです。婚資のやりとりや家族に子が授かるか否かは、婚姻の成立と継続の重要な要因で、こうしたことをあれこれ訊くのは野暮というものです。(興村 暁子)

写真：新婦は圧倒的にウェディングドレスの装いを望みます。2008年  
“アールディーアイ通信 No.43/2009”から

## タイの紐結び

1983年から4年ほど東北タイで技術協力の仕事をしました。別れのとき、農業生産や生活の向上とともに努力してきた地域の農民が、多くは夫婦で集まって送別会を開いてくれました。集まった人たちは、帰国する私どもに代わる代わる、世話になった、健康に留意を、いつかまた訪ねると、前腕に紐を巻きながら話しかけます。親しい仲の人たちが別れるときに必ずする儀式だそうです。その後、タイ人の知り合いに、紐結びはクワン(KWAN)という儀式の一環と説明されました。クワンとは人の身体に存在していなければならない”なにか”で、いなくなると不幸になったり、病気になるので、クワンを身体に留めておくためのさまざまな儀式があるのだそうです。クワンを身体に結びつけるために紐が使われ、このやり方は、地域によ



写真：タイ コラート県 1984年  
“アールディーアイ通信 No.42/2009”

て多少の差がありますが、タイ全土で行われていて、紐は通常2〜3日から長くて7日間、ほどかずにおくそうです。

タイの農村では、訪問者がだれでも、外国人であっても大切に遇してくれます。思い出旅行に昨年(2008年10月)、東北タイのかつての勤務地を訪ねました。25年以上経っても、何戸かの農家の方々が覚えていてくれて、大変な歓迎を受けました。(吉田章：1983年6月から1年間個別派遣専門家として、1984年10月から3年間からプロジェクト派遣専門家として、東北タイ農協振興プロジェクトに参加)

## ウルグアイで彗星を見た

2007年1月、ウルグアイ国モンテビデオ市でマックノート(McNaught)彗星を観た。20日夜10時ごろ、近くのアパートから2~3フラッシュが焚かれ、一瞬“?”。「アッ、現れると聞いた彗星かな」と外を眺めると、南の空に長い尾を引く彗星がくつきりと見えた。この齢にして初めての経験である。

「どのように現われる?」と、翌日は日没時から待機した。ラプラタ河の水平線に未だ夕暮れの残照が残る頃、ウッスラ「現れたか」と目を凝らせば、時を置かず見る間に彗星の雄姿となった。「尾の先端が観測された」と、日本の天文マニアの写真がネット情報に載っていたが、これを観たら歓喜の涙を流したことでしょ



う。

30数年前、電気のないタンザニアの片田舎で雨上がりの漆黒の夜、「空にはこんなに沢山の星が在るのか!」と感心したのを覚えているが、今回の忽然と現れる彗星もまた素晴らしかった。そして、こうした現象に突如遭遇し、「世紀末か?」と怖れ戦いとされる古人の心境を推察するに十分な天体ショーであった。(森田信晴)

写真撮影者:八百谷圭祐氏 2007年

“アールディーアイ通信 No.41/2009”から

---

## ホンジュラスのオレンジジュース

街を歩いていて、喉が乾くとお店で何か飲むものをと考えるが、そこに置いてある飲み物は殆どが炭酸飲料で、コークから、日本では考えられないような、バナナ味など奇妙な味の清涼飲料水が並んでいる。でも僕の好みではない。

そんな時お勧めなのが「フーゴ デ ナランハ」、オレンジジュースである。絞りたてのオレンジを出してくれるので、これほど美味しい飲み物はない。しかも、5レンピーラ(日本円で30円ほど)とかなり安価で飲む



ことができる。買う時は、町で露天の袋に入っているものを買ってはいけない。なぜならすでにごつとりと砂糖が入っているからである。買う時は、目の前で絞っているお店がいい。その場で飲むときは、コップに入れてくれる。そして「パラ ジェバール(お持ち帰り用)」と言えば、ビニール袋に入れてくれるので安心して買うことができる。

「フーゴ デ ナランハ」はホンジュラスで数少ない僕のお気に入りの一つである。(及川義明:2006年11月から2年間、ホンジュラスでシニア海外ボランティアとしてラン栽培指導に従事)

写真: オレンジを絞る娘さん 2008年

“アールディーアイ通信 No.40/2009”から



## パラナ河畔のカーニバル

パラグアイの南部、大豆や小麦の農産物生産地として知られるイタプア県の県都エンカルナシオンは、国で3番目に大きい町とされていますが、人口は6万人強です。緑が多く、落ち着いた雰囲気、佇まいも人もかなり感じのいい町が、毎年2月になると人口が膨れ、通りは喧騒に包まれます。国で最も規模が大きいカルナバル(カーニバル)の季節です。何ヵ月も前から準備をしてきた踊り手も、内外から集まった観客兼にわか踊り手も、明るいうちから鼻息荒く身体をむずむずさせて黄昏を待ちます。音と光と石鹸水と熱気が爆発するのは午後8時頃。両側に観客席が作られた通りを、大仰にきらきらに着飾った男女や、身に着ける布を極端にケチった娘さんたちが、ブラジル音楽に合わせて身体を震わせて踊り、跳ね回り、練り歩きます。観客にはあちこちから水や石鹸水が浴びせられます。



12月から1月にかけて、肌を刺し貫くような熱い光を連日浴びた後、まだ建物も樹も人も火照りでゆらゆらしている時期、アルゼンチンとの国境を流れる大河の畔で繰り広げられる熱狂です。(小渡陽善:2005年11月から2年間、パラグアイでシニア海外ボランティアとして環境保護 教育分野で活動)

写真:得意の踊りを披露する娘さん 2007年

“アールディーアイ通信 No.40/2009”から

---

## ニカラグアの豊かな漁場

ニカラグアは、西を太平洋と東をカリブ海に挟まれた国です。近隣諸国のコスタリカやエルサルバドル、ホンジュラスなども海に面した国で、水産資源は過去豊富にあったようですが、現在は数百キロの陸路を魚や海老の買い付けに、ニカラグアまで毎日大きなトラックでやってきます。これらの国では漁具や漁法が進んでいて、結果として自国の魚を獲り過ぎたため、大型の魚がほとんどいなくなったのだそうです。新しい技術で、何の規制もしないと自然資源はすぐになくなってしまいます。

ニカラグアには多くの漁港がありますが、ここに紹介するのはポトシ漁港です。入り江になっていて良い漁場です。少し沖に出るだけで魚が獲れるそうです。対岸のホンジュラス側ではもう獲れなくなり、越境して



漁をする漁師が増えたため、国境警備隊と軍隊が密漁の監視をしています。タイ、アジ、鰹、ヒラメ、アナゴなど、どの魚も日本とは比べようもないほど安い価格で取り引きされているため、近隣諸国からトラック

で買い占めに来るのもよく分かります。(投稿:福岡正行さん。2008年8月から2009年1月までニカラグアへ農業協同組合分野でシニア海外ボランティア短期派遣)

写真:海の向こうに見えるのはホンジュラスの山。右端に小さく国境警備の船。2008年

“アールディーアイ通信 No.39/2009”から

## 大活躍の中古自転車

ガーナでは、日本からの中古自転車が活躍している。最奥アッパーウエスト州で前かご付き“ママチャリ”が街中や田舎を問わず至るところで見られる。4年前、首都アクラ滞在時に比べ、その増加は目を見張るばかり。ただ、「〇〇県警防犯登録」「××高校通学証」や住所氏名の記載などを見ると、「どんなルートから入ってくるのだろうか?」と勘繰りたくもなる。実際に使用中のカウンターパートによれば、価格は今まで主流だった中国製実用車の新車とほぼ同じ 50 セディ(約 3,750 円、2008 年 12 月)ほどで、軽いのが受けてい



るとか。内装ギヤや点灯装置、ブレーキ等が中国製より洗練され機能的に見える。利用者に偏りは無く、老若男女を問わず移動、通勤、通学、荷物運搬ほか多くの場で活躍している。

日本では駅前など無秩序駐輪が社会問題になっていて、乗り捨てや盗難車も多いと聞くが、そのまま朽ち果てるか、処分されるのは“もったいない”。2010 年から海底油田の産油国となるガーナとて、手軽でエコな自転車は当面恰好な庶民の足に疑念の余地なし。持て囃される日本からの中古自転車、ガーナで使い潰されるまで走り続けている。(森田信晴)

写真:ガーナの中古自転車 2008 年  
“アールディーアイ通信 No.39/2009”から